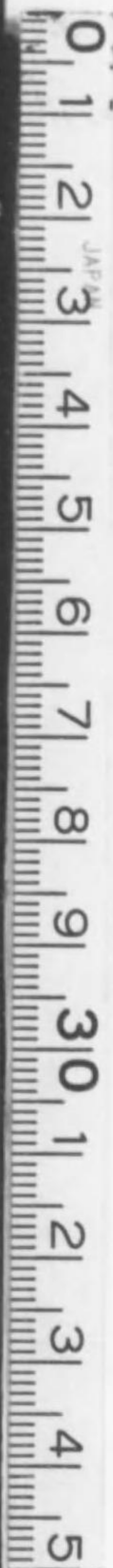


算法童子問

一卷

302  
246



始



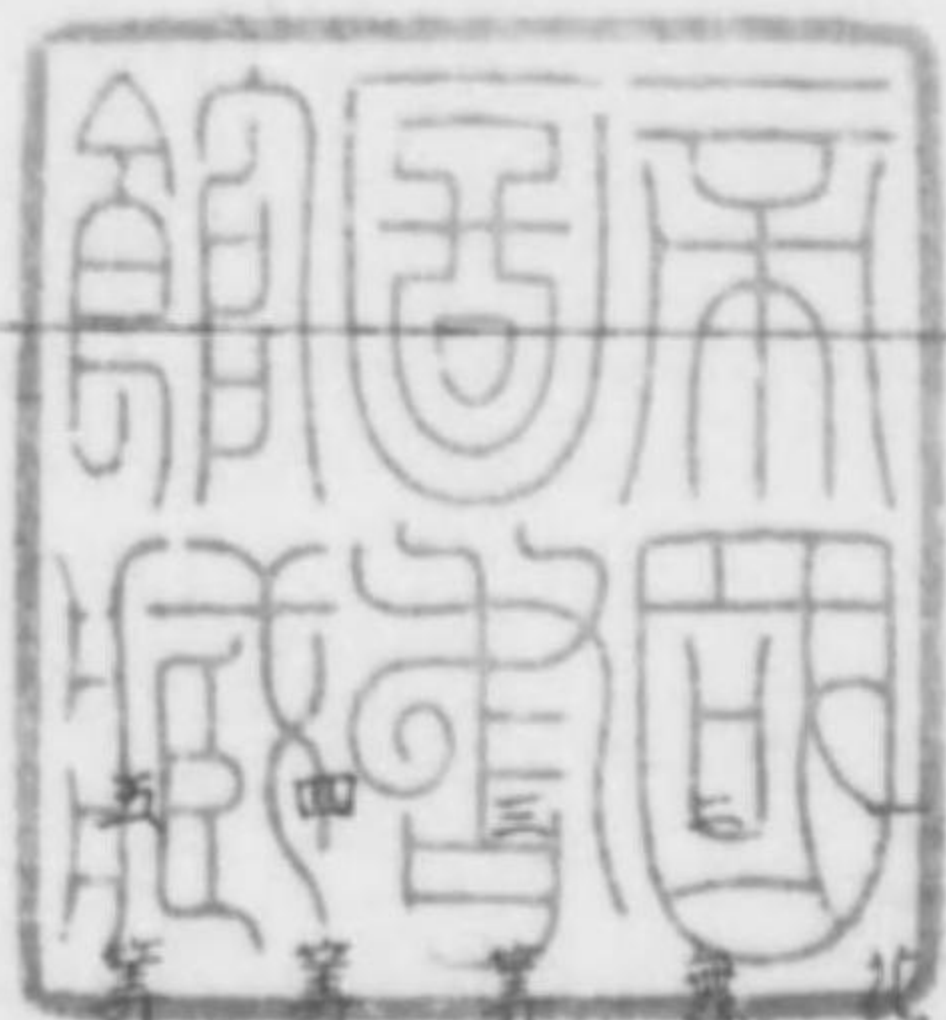
302  
6  
246

算法童子問

村井中漸著

一卷

算法童子問 卷之一 目錄



此を賣事

舞姫の事

三 算類開平方

四 算類開立方

五 算類の法

六 廉率の事

七 皮商の事

八 かぞへ歌だて

九 四畳半度敷の事



算法童子問 一 卷

十 譲り金配分の事

十一 鶴狗章魚たかこの事

十二 遺跡の事

十三 甲乙同数の事

十四 碁石のうらふひの事

十五 兄弟の年数をしる事

十六 環路やうろく方程の事

十七 三七の差の事

十八 宛にて客数をふる事

十九 割賦算の事

二十 左傳支乃字の算

廿一 源氏物語杯の子の餅の算

廿二 つれ／＼單馬のきつりやうの算

廿三 蘇武そぶの事

廿四 田の中の牛の事

廿五 紙鳶いかたをのぼす事

算學淵原

童子問ていはく算はいづ此の世にはじまれるまたその興廢はいかん答て曰くむかし黃帝の時隸首作りたじめたりといふふかれども伏羲の八卦こそその始といふべし

周公その太夫商高に教はいづくより出るやと問商高曰教の法は円法より出づ円は方より出で方は矩より出で矩は九々ハ十一よりいづといへり周礼保氏掌諫王而養國子以道乃教之六藝とふりその中に九教あり漢の劉徽九章算術を作る許商社忠卓茂劉歆馬融鄭玄

何休張衡陳熾王粲のともがら皆此を善すとふり唐  
宋のあいだ士を振るに明算料あり唐の六典に算學十  
徑博士弟子五年にして學成るといへり宋の邱康節司  
馬文正朱文公蔡西山精算ふらずといふ事ふしふかん  
づく宋の大觀年中古来の算學六十六人を封じて公伯  
子男の四等にわかち公に封ずるもの九人伯二十八人  
子二十人男九人ふり祖冲之その選にいりて子封を得  
たり此人算成論する事の精密ふる古今独歩ふり隋の  
律歷志につまびらかふり本朝におゐては孝德帝大化  
二年正月甲子朔詔して曰聰敏にして書算にたくみふ  
るものを取て主政主帳にせよと之文武帝大寶元年  
令を選定せられて算博士の職あり清和帝貞觀四年

四月十五日勅解由ノ次官從五位下兼行算博士家原者  
称氏主を美作権必に任ずといへり保元のところ日向守  
通憲まゝこだての算を傳ふといふ當道に長ゆる家は  
小槻三善の西氏之とを中古戰國におよびて九章の學  
隨て地に落つ士は軍務に勞し民は流離にくらしみて  
除算を煩ふりとして用ひずたゞ乘算のみをおこふふ  
此を正慶算といふと之今の龜井算の類之較近慶元  
の間草昧のはじめ毛利出羽守重能さろはん掃除の法  
二冊をあらはし弟子におしゆ其術開平法に及ばず亦  
後世算家の律梁ふり此時四海昇平をたのしみ藝に游  
ぶ人多し吉田光由いで、塵劫記を作りて大小せに行  
ふふふかれ共その術開平開立盈朒方程又過る事ふし

次て澤口一之出て朱世傑が算學啓蒙を得て天元術を  
發揮して古今算法をあらはす又孝和先生傑出の才を  
ふるひ諸約法密術を涉獵し發明する所前代に超過し  
て算學大小ひらけたり實に命世の才といふべしそれ  
よりこのかた其門に出る徒枚擧すべからず建部松永  
久留島中根の諸先生出て此道に從事せり予がごとき  
その支流を汲みてわづかに藩籬をうかひふ事を得た  
り世人大率算學の本旨を論せず經濟の益ある残置き  
わづかにその末駟まゐり僧計けいけいのたよりたるを以て商賈販  
夫の日用とふる故に家々戸々に算盤一面を具せずと  
いふ事なしかのしんじん大たい夫ふう視て市井の俗物とす宜なる  
哉その術を見ればみふ債殖の蠶子法にして亦商賈の

産業實に太平の餘恩なり士君子の興るところならん  
や大抵算の興廢かくのごとし遠くは史傳に考へ近く  
は口碑にもとむといへども不残おそらくはあやまり謬長残ま  
ぬかれば博雅の海涵をこひ跡がふのみ



善法童子問 卷之一

① 花成賣る事

大原のさとより出てはふをうる女あり桃柳さくらうつ  
ほきの四種のはふ成三種づゝえうみ毎日一種をとり  
かへみやこの町をうりありきしふころは弥生三日あ  
る人その日の三種桃柳椿を買ひぬそのよく日きのふ  
の花をけふも買べしといへは女のいはくけふは桃は  
なくして柳さくら椿ふりきのふの三種は又ぞや来る  
七日にうりまいらすべしと答へし

此は花四種のうち毎日一種づゝ取かへ三種とふ





してうる時はすべて四色にかはりて三日より六日  
までにうりつくせばまた七日めにはもとの三艘に  
かへるこ

術曰四艘に一を加へその内三艘引のこり余り二艘  
左右に置右に三を加へ左りをかけまた二を加へ左  
りをかけこれを実とし〇一ニ三かけ合し六と成を  
もって突をわれは四と成るぞ此へ三日を加へて七  
日とふるゝと

③ 舞姫の事

むかし齊の國より魯の國へ舞姫八十人をおくれり魯  
のきみよろこびたまひその八十人のうち六人成一隊

とふし又その一隊のうち一人づゝとりかへてまい日  
舞かふでたのしみ給ふその舞姫の姿態のかすすみや  
かにふる術を問

答 姿態の数三億〇〇五千万〇〇二百日

術一ニ三四五六相乗じて七十百を法とし七十五〇七

十六〇七十七〇七十八〇七十九〇八十相乗して千

〇一十六十三億六十を突とし法成以て除けばふるゝ

と

これは前の花うりの問とおふじ前には本術をもつ  
て答ふたゝは畧術成もつて答ふその原術は二艘  
の姿は変梁術三艘の姿は三角裏梁術四艘は再乗梁  
五艘は三乗梁術なりこれに六人一隊ふるをもつて

四乘梁なりその餘表梁の簡術これをもつてふせうへる準知べし

③ 算類開平法

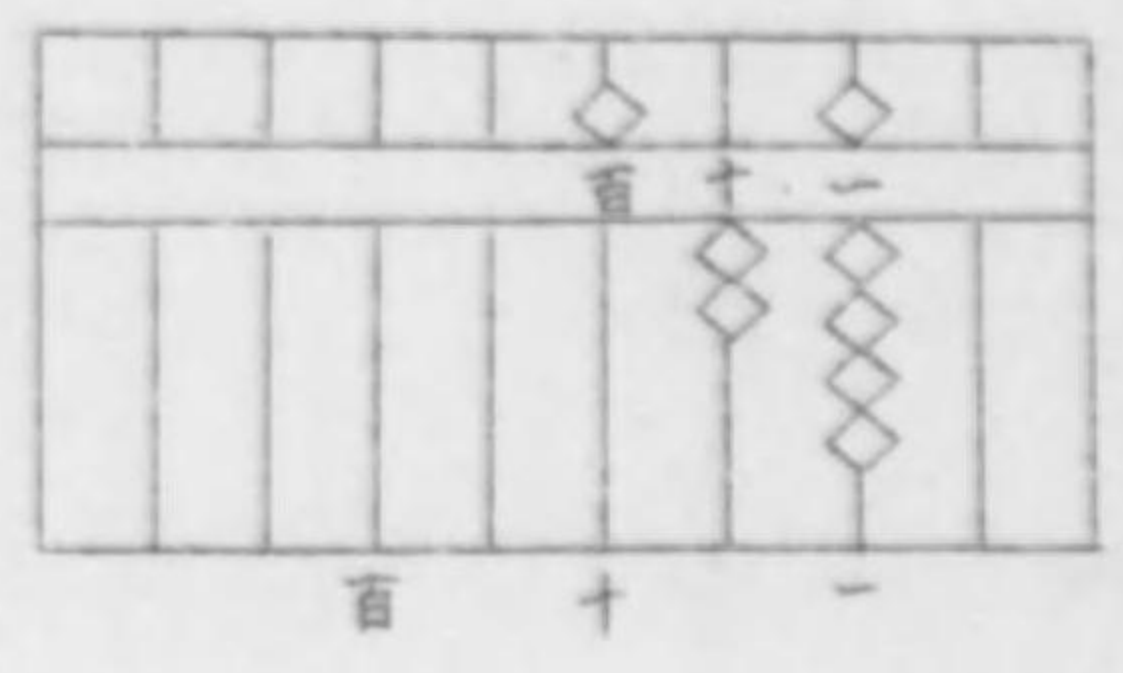
一ノ半	ニノニ	三ノ四半
五五十二半	六六十八	七七廿四半
八八廿二	九九四十半	以上半九々の声也

方

四のごとく平方あり積五百廿九歩  
方面何ほど、間

答 方二十三間

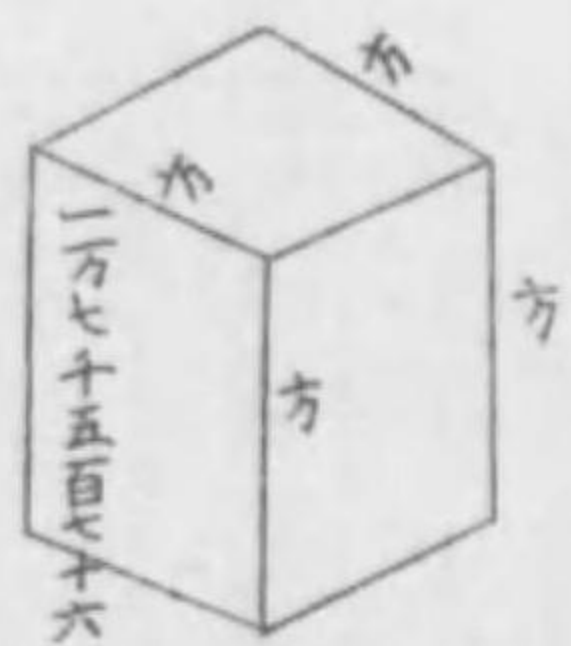
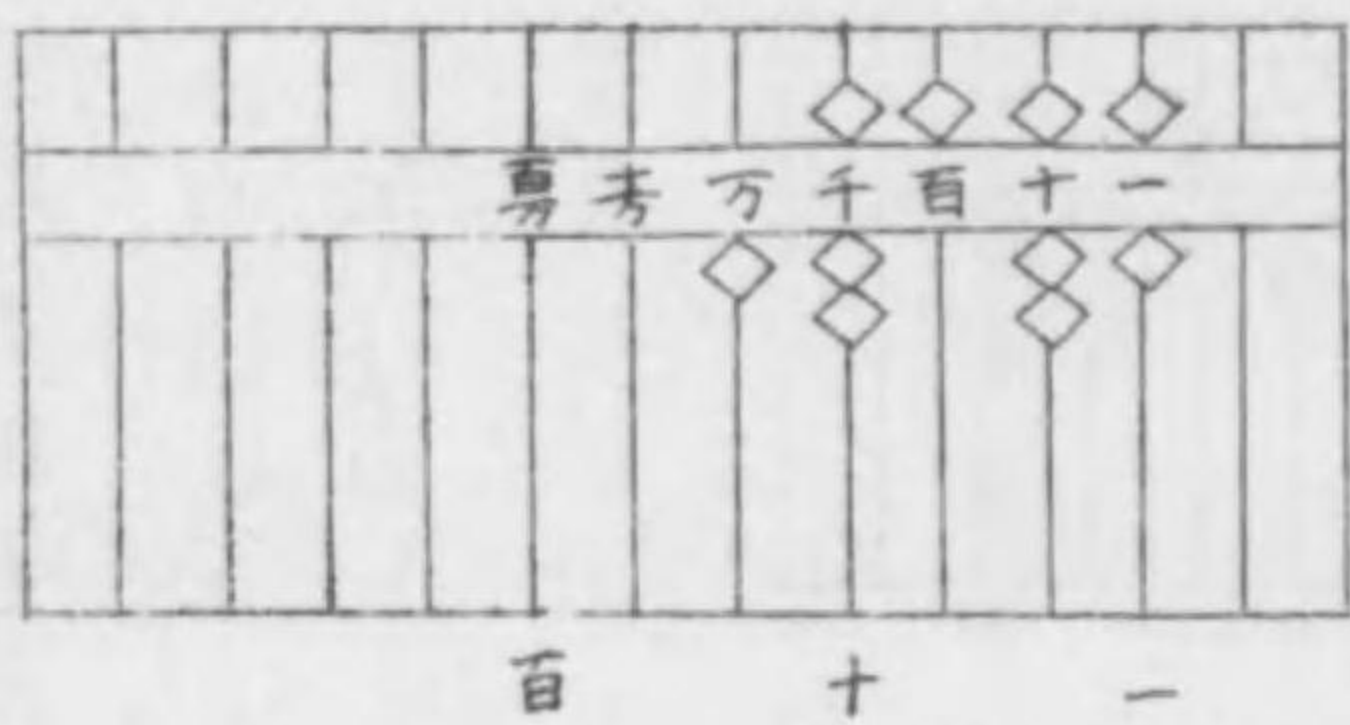
術一の位より一位をへだて一十百  
トかぞへのほりて十位小て商を二



平方あり積十方〇一千百廿四間方面何程と問

答 三百十八間

術一の位より前のごとくかきへのほる時百の位小  
て商を三百とたつるここの三百を九九によび三ノ九



八八五百十二

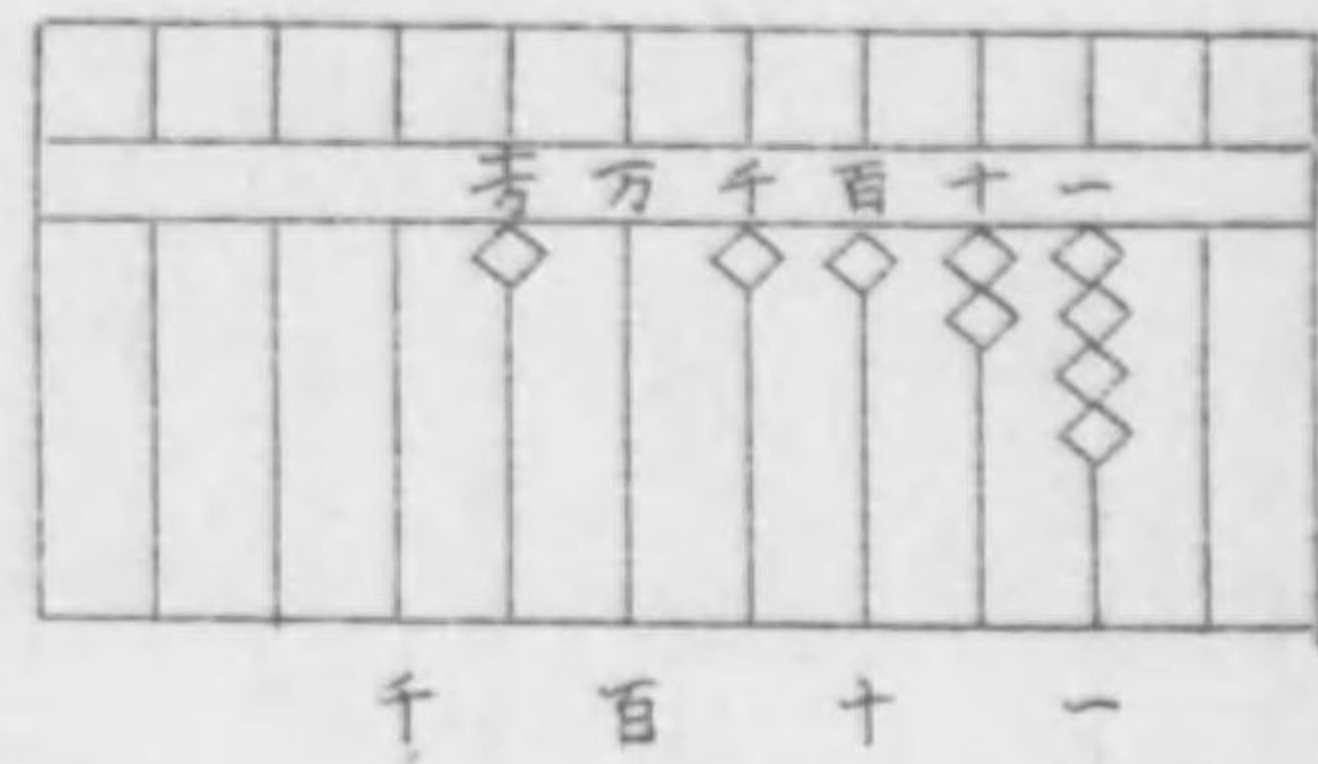
九九七百廿九

以上再乗ノ声也

四のごとく立方あり積一万七千五百七十六歩立方何程と問

答立方二尺六寸

術一、位よりニ位をへだて一十百、か  
 ぞへのほりて十の位にて商、或二十  
 と立てこの二十を立方のこゑによ  
 びニ、八千を突の内にて引のこりを  
 三ニ除き又商のニをもつて除くさて  
 此うち商を以て除けば次の商六寸  
 を得これを九々、声にて六六六を突、  
 内にて引残りへ三と二と残乗じま



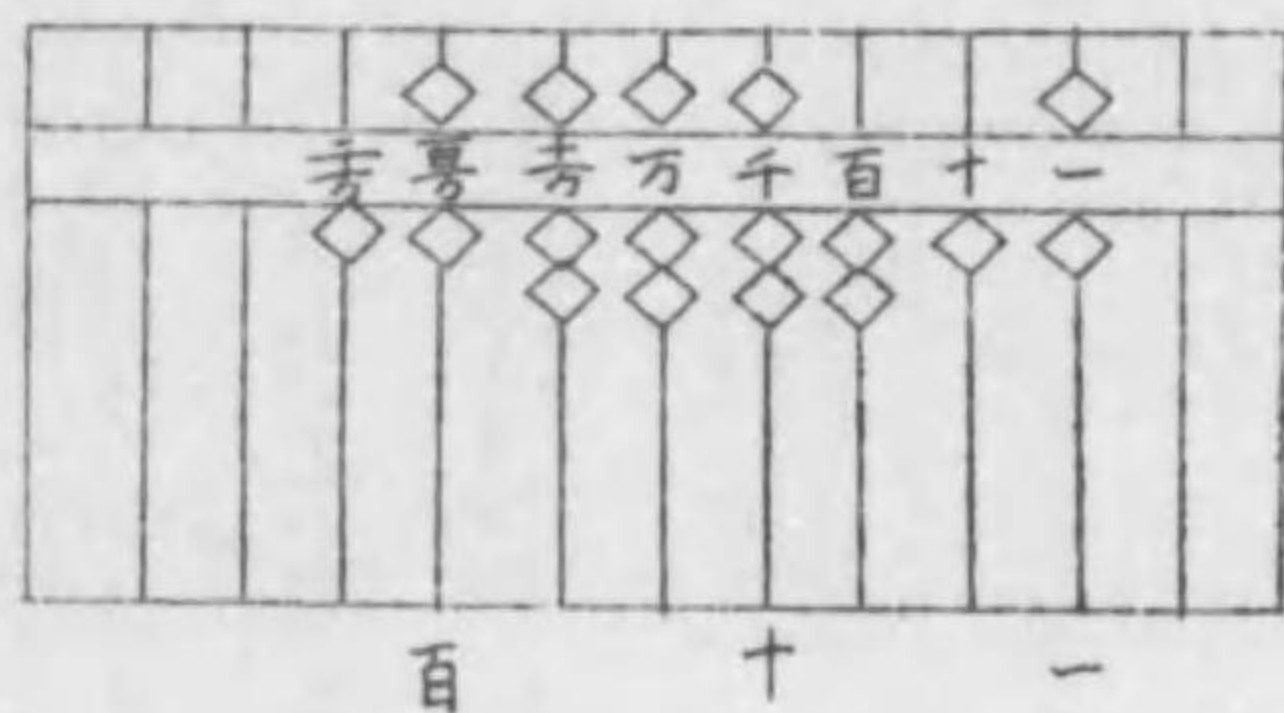
④ 算類開立法

一一ノ一      二二ノ八      三三ノ二十七  
 五五百廿五      六六ニ百十六      七七三百四十三

を突ノ内にて引のこりをニニ除き又  
 商、三を以て除くさて次の商十とふ  
 るこれ或半九九のこゑよて一、半引  
 のこり又商、三百十或もつて除けば  
 次、商八とあるこれをニ、商十と相乗  
 して八、八引また半九々、声よて八三  
 十二と引ときは三百十八間と知る  
 也

た六十再乗の声<sup>六六</sup>二百十六引時は二尺六寸と云る  
るこ

立方あり積千六百七十七万七千二百十六坪立方何  
程と問



答方二丈五尺六寸  
術一、位よりわざへのぼる事まへの  
ごとし夫の位にて商残ニ丈と立ラニ  
八百を突、うちにて引のこり残三小  
わり又商のニ、除きふたゝび商残  
もって除けは次の商五尺を得これ  
を九々、声にて五二十五突の内にて  
引残りきニと三と残乗じ五尺立方、

声五<sup>五</sup>百廿五引そののこりを一二の商ニ五残以て除  
き又三<sup>三</sup>除き又二<sup>二</sup>五<sup>五</sup>除けは三<sup>三</sup>商六寸残得さて二三<sup>三</sup>商  
を呼びて六<sup>六</sup>三<sup>三</sup>十<sup>十</sup>引三<sup>三</sup>商残呼て六<sup>六</sup>三<sup>三</sup>十六<sup>十六</sup>引のこりへ  
二五と三と残乗じ立方の声<sup>六六</sup>二百十六引ときは二  
丈五尺六寸と云るゝ之其餘はこれ<sup>こ</sup>れを以て推知るべ  
し

○右算類開方術は師家相承して発明するところの  
秘術なり故に弟子からざればみだりに傳ふる事を  
申るさず年をへて他様に見ふらひ往々板本に行ふ  
といふこ此道のためならずと難先哲発明の労をおも  
ふべし轉訛をもおそるべし故にたゞに改正して其  
一二條残あらはすもの之

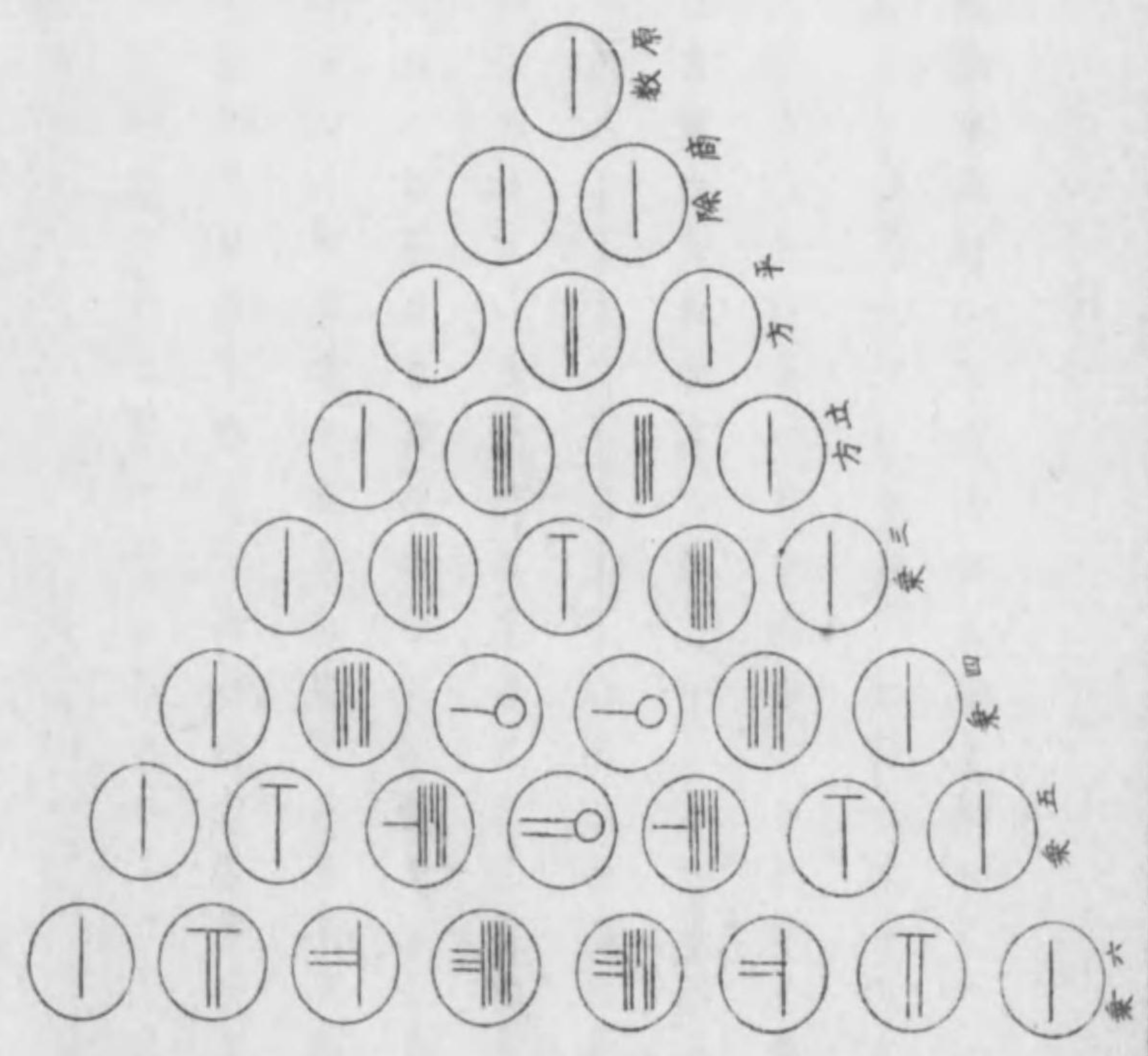
⑤ 算筭の法

異名相乗為負 同名相乗為正

算木といふは方二分長一寸二分赤きと黒きと二種ありてあかきを正算といひくろきを負算といふ陰陽の義かり正と負と相乗するを異名相乗といふその時は負算を置べし負と負又正と正と相乗するを同名相乗といふ正算を置べしいにしへの算木は竹をもち中廣二分長三寸正の策三廉にして二百十六枚をつみて六畝とす乾の策之負の策は四廉にして一百四十を積て方とふす坤の策かり正負の策合て三百六十枚といへり算木の用やうは諸算書に見へたり

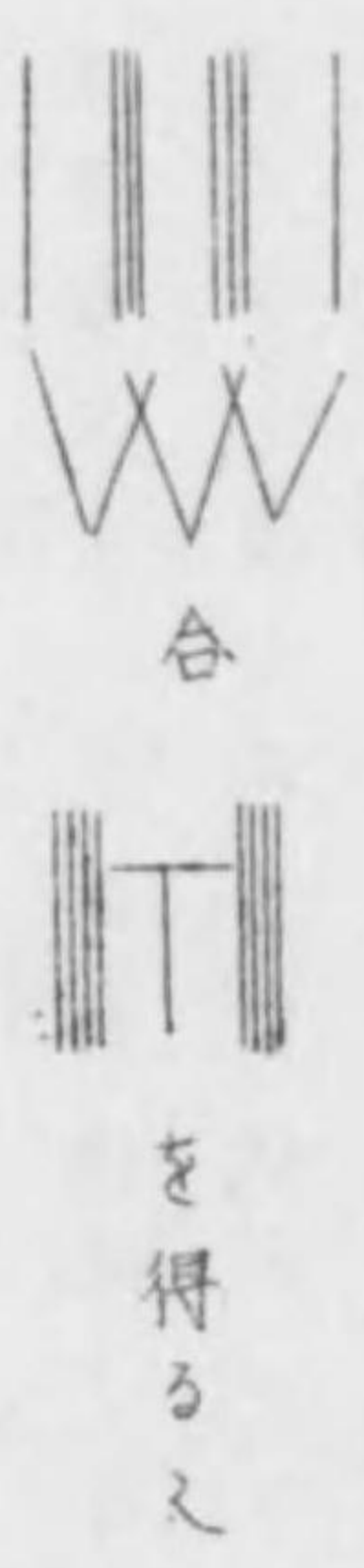
⑥ 廉率の事

廉率といふは算木を以て或は自乗再乗して数十乗に至るといへ共各その乗式定りたる算木あらはるゝたとへば算木を実法の上下に置て  
かくのごとし是戌甲式と名付て自乗すれば平方式と成て  
———  
かくのごとし是へ甲式を乗すれば再乗式と成て  
———  
かくのごとし是へ又甲式をかくれば三乗式と成て  
———  
かくのごとしその  
余幾乗式にいたるともたれは準知すべし



平方式の算木は商除の  合て  を得立

方或は平方  合  を得三乗式は立方の



是乗式の通例ふり上の図成横に見るべしそれの諸乗式の算木あらはるゝ之

⑦ 菱商の事

今立方を設けて勾足法の三商成もとめんとすその算式を問

答左のごとし

	實
	方
	廉
	隅

右の式立方式に開いて正商に勾三寸を得其次實級空となる故また平方式に開て正商に尺四寸を得其次方級空とふる故掃除式になりて正商 = 玄五寸を得もつとも勾尺玄前後にかゝはらずいづれより成とも勝手次第にひらくべし

右の式作りやう勾尺玄相乗して十六實級に置角〇勾尺玄たがひに相乗して三位合せて七十四方級に置正

〇勾尺玄相併 = 十廉級 = 置角〇一算を隅級 = 置正

今三四五六の四商級求むる三乗方式を問

答 左のごとし

	実
	方
	初・廉
	次・廉
	隅

右三乗式三と四と五と六と次第にかゝはらず聞くときは好むところの商を得る之第一番には実級空位とふる第二番に方級空位とふる第三番に初廉空位となる第四番に次廉空位とふるかくのごとく三

四五六の四商を開き尽して算木空とふる之

右式の作りやう五三四相乗して六三百実級 = 置正五三四

相乗六三四相乗六三五相乗六四五相乗此四数合三二百四方

級 = 置履四三相乗五三相乗五四相乗六四相乗六五相乗六三相

乗此六数合九百十初廉 = 置正五三四合十八次廉 = 置

履一算を隅級 = 置正

此外その数はのぞみにまかせ定りなし開方式の作りやうは右まふさうへ知べし

⑧ かぞへ歌立

ある人宇津の山邊をすぐるとて冬がぬしいとどさびしき道のはとりにひとつやのありければ

三さ十と十と百を九く。三み千ち百も三さ三さ四し八や。一ひと八つ二に。四よ五じ  
ととにに四し六く。四し百も八や。三み十ち七ふ六む。

そのうちかへるさにもとまじ道を見ればその一つ屋もいづちへ行けんなくしてたゞ茫然たる野辺のみなりき

此うたの文字を算木につくりて霜みつといふ数三千四百を履算にしてその外はみふ正算とし算木をあらぶる事左のごとし  
たゞし三さ三さ四し八やの四八のかずを四十八とするなり



	三十	実
	十	方
	百九	初廉
	三百三	二廉
	三	三廉
	四八	四廉
	一	五廉

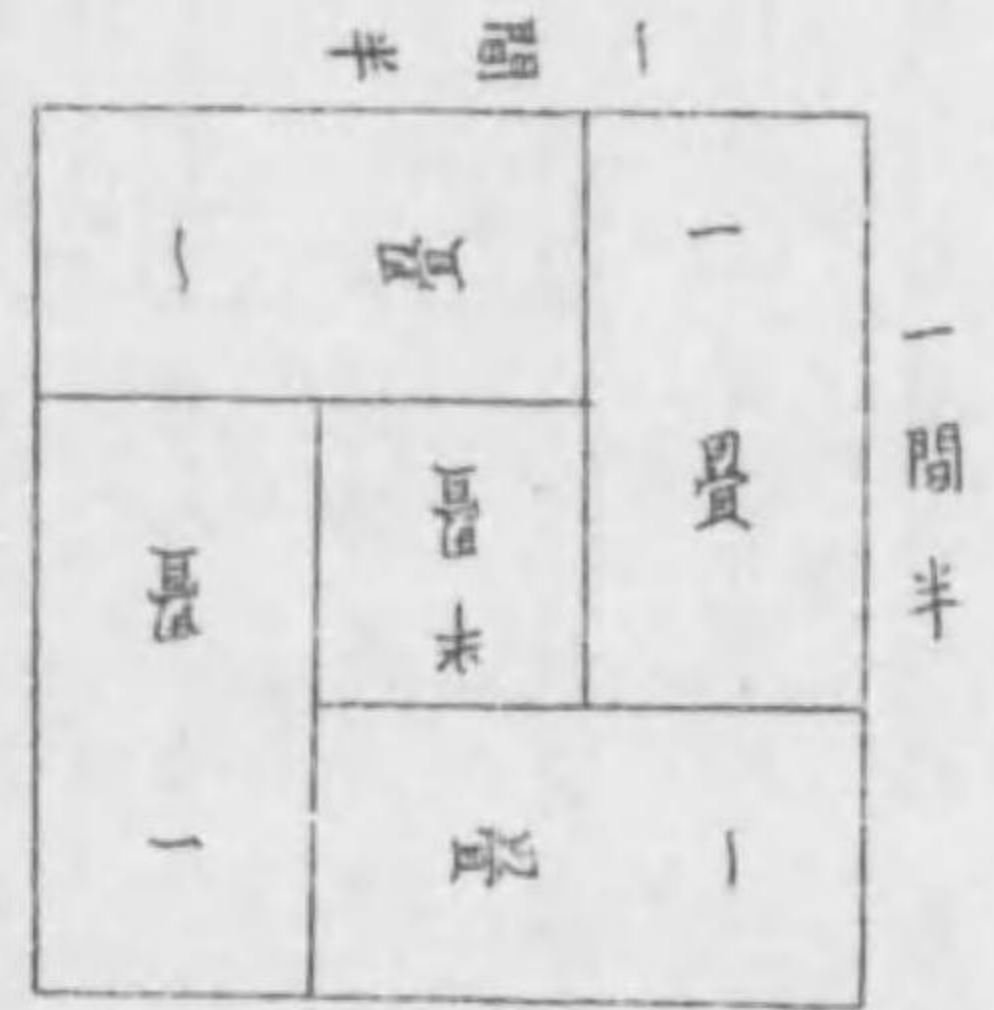
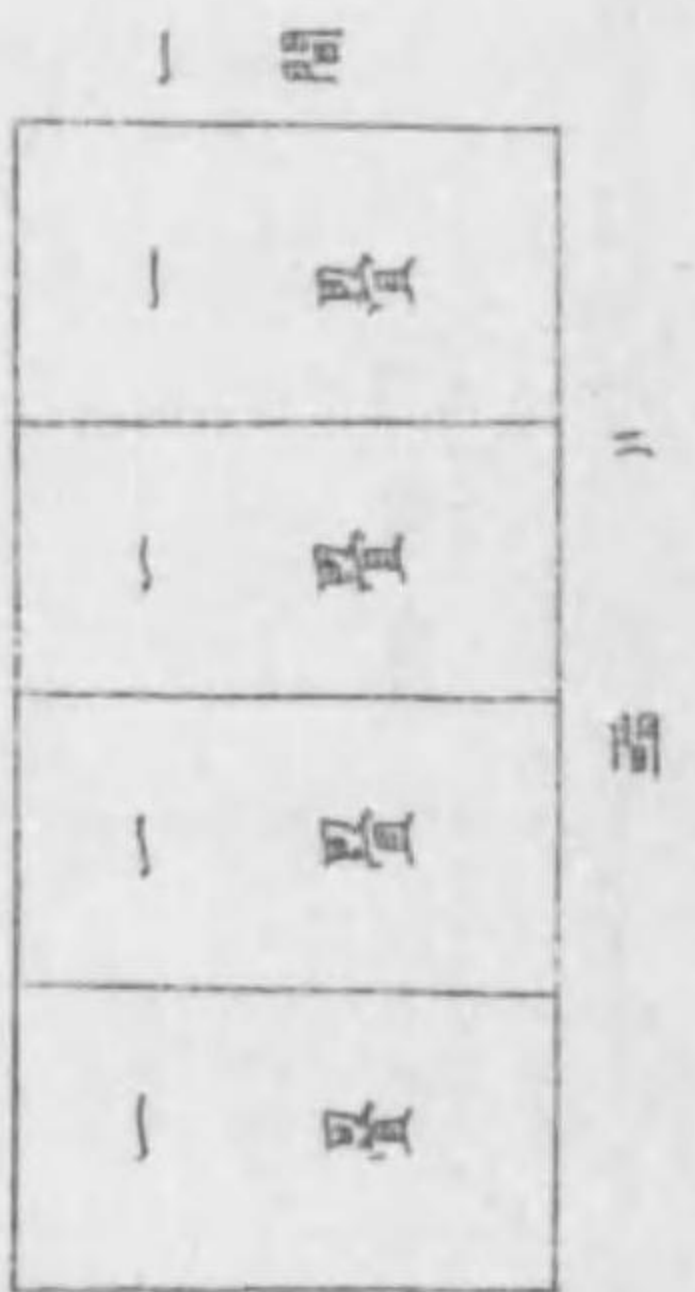
	八	六廉
	二	七廉
	四	八廉
	五十二	九廉
	四	十廉
	六	十一廉
	四百	十二廉

	八	十三廉
	三十	十四廉
	七	十五廉
	六	偶

此式を商に一と立て十六乗方にひらけは実級に一  
 つ屋の一のこる又上より七番目一つ屋といふ一  
 算残はぶきてさかさまにひらく時は一つ屋もふく  
 して算木みふ空とあるこれかへるさに一つ屋もふ  
 くして野辺にふりたる体と  
 又算盤にては正の惣数を置そのうち肩三千四百を  
 引ゆ一つ家の一のこる又正の内一つ引たる残りを  
 もって肩三千四百の内にて引はらへは何もふくふ  
 ると

⑨ 四疊半座敷の事

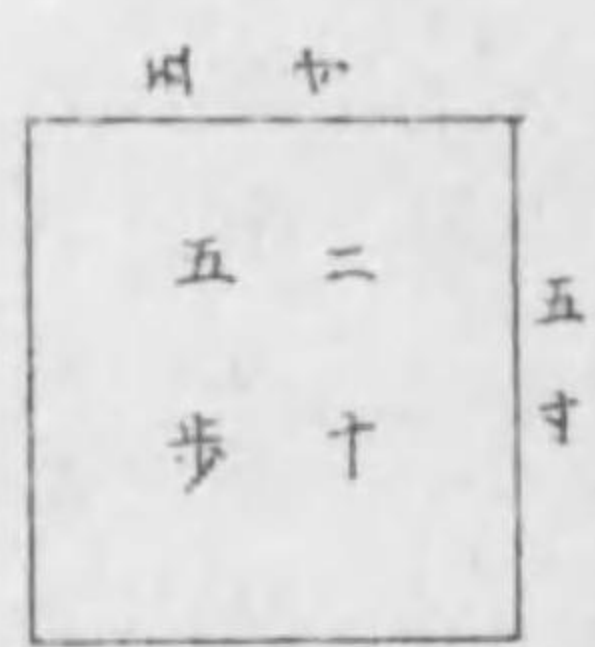
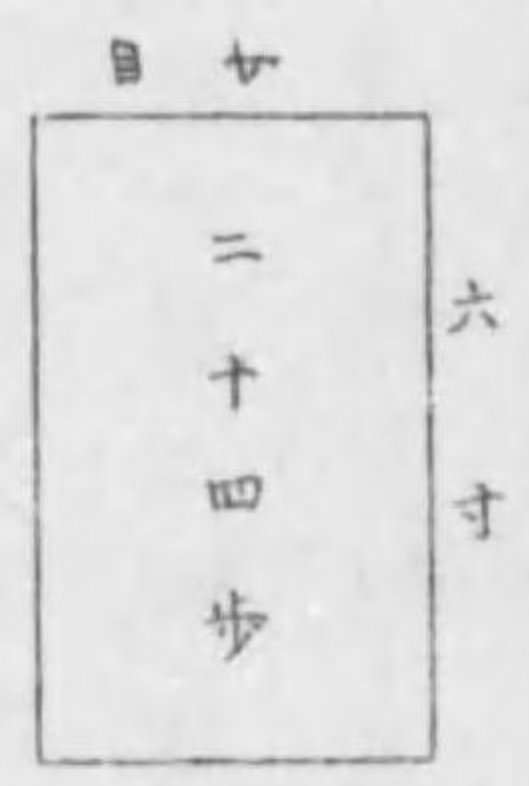
或人問た、み四疊をかくのどとくふらぶる時は四方



六間の繩にてかこむ時す  
こしの余欠なし  
しかるに又かくのごとく  
一間半にあらざる時は四  
方やはり六間繩といへ共  
内に半畳一つ出来るこま  
への図または余欠なくし  
て此図にては半畳有いか  
ん

繩にてかこみ同数あるといへとも内の坪数に多  
少出来る事は直形と方形とそのかたち異なる中へ

答ていはく惣ぐるりの



なりたとへば  
上下の図ともに惣く  
るり同じく二尺の繩  
にてかこむといへ共  
方形は一步おほし

⑩ 伊づり金配分の事

子三十五人ありその父金千五百五十二兩をわかち共  
ふたゞし十五才以上の男子一人ごとに六十八兩づゝ  
十五才以下の男子一人ごとに三十七兩づゝ女の子に  
は二十三兩づゝ之男女子供のかずをのく幾人ぞと  
問

答

十五以上の男子十一人  
 十五以下の男子十八人  
 女子 六人

術三十五人を置六十八兩を乗し此内千五百五十二  
 兩引のこり八百廿八を別に置〇六十八兩のうち三  
 十七兩引のこり三十一又六十八兩の内廿三兩引残  
 四十五四三五五十一互約術に依て約ふらず三十一枚減数  
 とし四十五を加数とし剩一術に依て廿段を得これ  
 へ別に置たるを乗じ減数三十一にみつれば返すて  
 余り六とふるを女子の人数とす其余は類を以て推  
 すべし

此術の明解は開商點兵算法に見へたり略之

⑫ 鶏狗章魚の事

厨下くわげを類へは庭に鶏あり狗あり又砧板きねに章魚あり庖  
 人がいはく三種合せて二十箇足数合せて百〇二足之  
 鶏狗章魚おのゝ幾何と問 但鶏二足狗四足  
 章魚八足

- 狗三足 鶏十三羽 章魚八枚
- 狗十二足 鶏七羽 章魚五枚
- 答五狗十五足 鶏五羽 章魚四枚
- 狗十八足 鶏三羽 章魚三枚
- 狗廿一足 鶏一羽 章魚二枚

右何れも足数百二本合廿四足之〇鶏免算ノ一種増  
 たれば外じよかに辞を加ふべしよからざれば答数かくの

ことく一種に定まらずいかようにもふるく  
 又翦管術の間に似たるをもつて翦管は狂て用ひが  
 たしといふ説あり非ふりおよそ数に生数熟数の二  
 種ありその熟数残らみ用申べし  
 其法は互約逐約の術によつて約分して熟数となす  
 たへは銀冶が鉄残煉るがごとしといへり又算問  
 に詳おほくして蛇足残添るも有故小先輩病題明知  
 術題術辨疑法ふといふ書残あらはしてこれ残辨ず  
 る事詳ふり學者ふかく察すべし

⑤ 亀蛙の事

高欄に凭て庭前の池を見れば六眼の亀あり又三足の

蛙ありその数をしらず足数合せて九十三眼の数を合せて  
 百〇二之亀蛙の数をのく 何程と問

答 亀 十二  
 蛙 十五

術六三眼相乘して十八ニ四眼相乘して八之少ふきをも  
 って多き残減じ餘十残法とし又九十三眼相乘して  
 五百五十八四眼ニ眼相乘して四百〇八少ふきを以  
 て多きを減じ餘百五十残実として法残以て除けば  
 蛙十五残得る之これへ三足残乘し四十五となる残  
 惣足数九十三の内にて引のこり四十八残亀の足数  
 四足にて除けば亀十二を得る之

⑤ 甲乙同数の事

甲数一百十二乙数六十八あり甲へ四十五づゝ次第に加へ乙へ六十七づゝ次第に加へて終に甲乙同数にふるその同数又加ふる度数を問

甲へ加ふる事二度

甲乙同数二百〇ニ

乙へ加ふる事二度

術六十七の内四十五を引のこり廿二を以て甲乙の差四十四を除けば加ふる度数二度としる是へ四五を乗し甲数を加れば二百〇ニとなる是甲乙同数と知と

甲数十八乙数十二あり甲へ十九づゝ次第に加へ乙へ十一づゝ次第に加へて終に甲乙同数にふる其同数ま

た加ふる度数を問

甲へ加ふる事二度

甲乙同数五十六

答

乙へ加ふる事四度

術十一を加数とし十九を減数として剰一術に依りて七段を得これへ甲乙ノ差六を乗し四十二となるを十九づゝ取拂へば餘り乙に加ふる度数四度を得これへ十一を乗じ乙数十二を加ふれば甲乙同数五十六と知之此内甲十八を引残り三十八を十九に除けば甲に加ふる度数二度を得る之  
右のニ問算題同じきに似たれども意義別とよく考ふべし

④ 碁石のうらなひの事

上中下三所に碁石をならべ上より中中より下へ同じ程づゝ石を増加へて其上下の石数合二百五十四有中の石数を問又吉凶を問

答中ノ石数百二十七にして吉之

術上下の石数二百五十四を折半すれば中の数あるゝ也奇の数を得るを吉とし偶の数を得るを凶とすこれはおのゝくハ十一増之

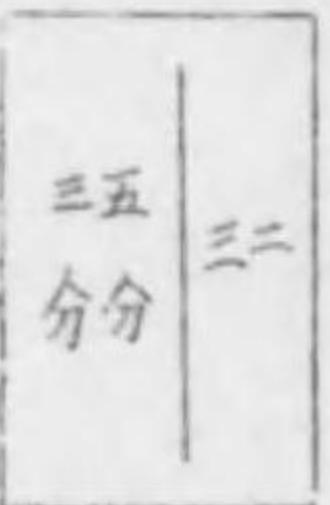
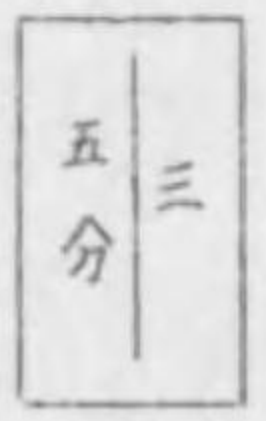
⑤ 兄弟の年の数をしる事

夫、に兄弟三人あり年我問ともいはず惣領太郎申けるはわが年を五つにわけて三つ分をとれば次郎の年

かりその次郎の年を三つにわけて二つ分をとれば三郎の年ふりといふおのゝく年の数を問

答 太郎 十五才  
次郎 九才  
三郎 六才

術算木一本をノ三としてとしそ此を又三分の二とし



かゝのごとし扱中下の二算五分に除くべきを除かず却

して  
 中ノ五分と下ノ五分とを消さんため之其因下のごと  
 びきを除かず却て上中の二算へ三分を乗す此義は  
 して  
 上ノ一算へ五分をかけ又下の一算三分に除く

	五分	上
五分	三分	中
三分	五分	下

上(五) 十五 太郎の年  
 中(三) 九 次郎の年  
 下(三) 六 三郎の年

(六) 櫻路方程

例年霜月のころ京わらべ其所の氏神をたき火してま  
 つる是を火たきといふまつり終りて供物をくばりあ  
 たゆみかん百廿八もち八十八を童男三十八人童女十  
 二人にあたへみかん百〇三もち五十九を童男十五人  
 童女二十九人にあたへて人ごとく幾つ宛あたるか問

答  
 童男一人ニみかん三もちニ  
 童女一人ニみかん二もち一

術

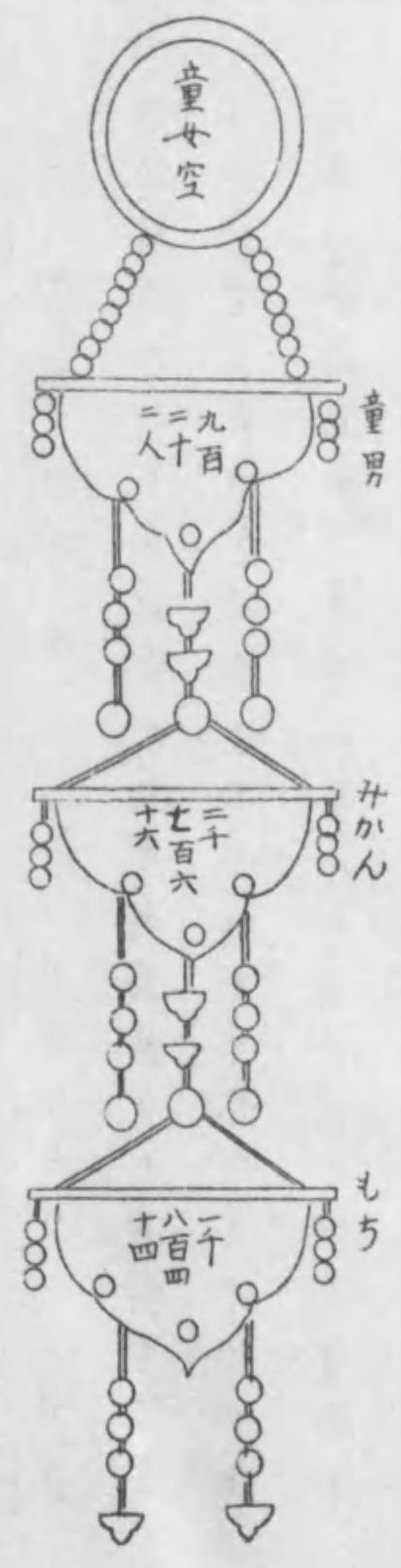
十二人	童女	三十八人	童男	百三十八	みかん	八十八	もち
-----	----	------	----	------	-----	-----	----

右

廿九人	童女
十五人	童男
百〇三	みかん
五十九	もち

左

右にある童女十二人を左へことごとく乗し左にある童女廿九人を右へことごとく乗じ右の通り左右たがひに相乗じて右の数の内左の数が減ずれば左の図のごとく成之



童男九百廿二人をもつてみかん二千七百十六を除けば一人に三つづくと知もち一千八百四十四を除けば一人に二つづくと知これ童男の分みかんもち一度にしろとなり  
此術世よにつたふる方程とは異なりそれは一色からではえれざる之長はみかんもちの外まんぢうをそへて三色にかりとも又は四色にあるともその好にいたがひ其品々の数一度にあらはるゝ事は櫻路の下り魚ゆぐりごとく故まようらく方程といふもつとも妙術あり

⑤ 三七の差の事



今足錢そくせん銀ぎん九百廿八メ文有是を甲乙丙丁、四人小三七の差をもつて配分する時おのゝ何程と問

答 甲五百四十八メ八百文

乙二百三十五メ二百文

丙一百メ〇〇八百文

丁四十三メ二百文

術三箇を再自乗して七十丁の衰法とす二十七を置七を乗じ三は除て六十丙の衰法とす六十三を置七を乗じ三は除て四十乙の衰法とす四十七を置七を乗じ三に除て十三甲の衰法とす六十三合して五百八十を法として惣錢數九百廿八メ文を除き此に各の衰法を乗ず此をのゝ 甲乙丙丁

の數を得る之甲乙二人の時は三を乙の衰法とし七を甲の衰法とし三七合して十を法とす

甲乙丙三人の時は三を自乗して九丙の衰法とす九を置七を乗じ三は除て二十乙の衰法とす二十一を置七を乗じ三に除て十九甲の衰法とす廿一四十九合て七十九を法とす

右の外四六の差あり宋ノ揚輝算法にいはく輝因列姑蘇有人求三七差術継答之尤不可傳以補衰分之萬一と見へたり此は三七の術は揚輝の発するところ歟

① 統にて客の數を知る事

河のはとりにいで、椀をあらふ女ありわたしよりこ  
 れを見て椀のかずは幾何ありやと問や答ていはくさ  
 のふわが家にまろふとおほく来りて飯器すくふし故  
 に飯は二人前を一椀まもり羹は三人前を一椀にもし  
 羹あじうものは四人前を一盞にもれりその椀盞のかず六十  
 五ありといふわたしもり聞て忘からばまろふどのか  
 ずは六十人ふうんと云てさりぬ

術椀盞のかず六十五を置廿四を乗じ廿六をもつて  
 除けば客の數六十人と知之

解  
 子 飯一椀 羹一椀 羹一盞  
 母 二人 三人 四人

母<sup>三ニ</sup>相乘して廿四を得又母をたがひに子に乘し<sup>十六</sup>  
 を得各相和して廿六を得

⑨ 割賦算の事

彦循先生のいはく負高きひたか百ノ目の内買掛り銀六十五メ  
 目は四分手形銀三十五メ目は六分の扱算用<sup>ラ</sup>前後二術  
 記して扱銀四十七メ目より多きもすくなきも無術と  
 知べしと之又ある人のいはく四十七メ目を峠として  
 銀高是より少ふきには御伽草子に記せる前の術を用  
 はずべし是より多きには後の術を用はずべしと之其術は  
 こゝに略す

たとへば右の負高にて扱銀九メ九百目ある時は前の

術を用ひて

四分方 五メ四百七十六又六分

六分方 四メ四百二十三又四分

又右ノ肩高にて扱銀九十四メ目ある時は後の術を用ひて

四分方 六十メ五百八十四又九分一厘

六分方 三十三メ四百十五又〇九厘

扱銀四十七メ目の時はかりは峠ふるは前術後術とも用ひて合ふり 峠の眞数

五分五分ノ扱は 五十メ目を峠とす

四分六分ノ扱は 四十七メ目を峠とす

三分七分ノ扱は 四十四メ目を峠とす

二分八分ノ扱は 四十一メ目を峠とす

右ハづれも其峠の銀高には前後の術通用すべしといへり

⑤ 左傳亥の字の筭

左傳さでん袁公げんの三十耳小絳がうけん縣といへる所ところの老人人にんに年としを

とはれておたふるやうは臣おみが生れし年は正月甲子朔

四百四十有五甲子矣そのはした其季そのはした於今いま三之一也がといふこの老

人は七十三にふるものがありのまゝにはおたえずし


てむまれたるよりこのかたけふまでの日の数をかぞ

へていへる之たとへは甲子の日は六十日に一度まは

るものふるをむまれてより此かた四百四十五度の甲

子の日にあひてその最末の甲子の日よりけふまでは  
 はした三が一にあたるといふ事之六十日の三が一と  
 いふは廿日なり甲子の日よりかきふれは癸未にあた  
 りり今この問答は十二月廿七日みづのとのひつじの  
 日の事之そのとき史趙してうといふ人これを開ていへる小  
 は亥有ニ首六身下ニ如身是其日数也といへり此亥  
 の字をかりて此老人のうまれし日より今日までの日  
 のかきをいふ之其いはれは甲子より甲子までは六十  
 日ありそれにて四百四十五を乗れば二万六千六百四十  
 日とふるこれハ六十日の三が一廿日を加れば日のか  
 ず二万六千六百六十日之これ算木につくりて見れば  
 亥の字の上に横ニくわくあり下に算木の



かたち三ッあり  かくのごとししかるが申へに  
 ニを首かしらとし六を身とすといへり上のニくわくを下  
 へおろしたてさまにして六身のかたはうにをくと  
 き かやう小成こなり之これ算の二万六千六百六  
 は 十のすがたふり

さればいましへの人算學は敏捷ふるを知べし一條兼  
 良公の御説にもこれ水を亥の字の算と名づけたりと  
 たまひしや



源氏物語子の餅の算

源氏あふひの巻上畧そのよさりぬの子のもちぬまい  
 うせたりかゝるおもひのほどふればことくゝあきさ

まにはあらでこふたはかりにおかしげふる檢破子ぶ  
どむり星戌色々までまいれるをみ給て君南の方に出  
たまひて睡光をめぐしてこのもちぬかうかすく小と  
いろをきさほふはあらであすのくれにまいらせよけ  
ふはいまくしき日之けりとうちほゝゑみてのたも  
ふ脚気色を心とき者ふてふと思ひよりぬ惟光たしか  
にもうけ給うてげにあいきやうのはじめは日えりし  
てきこしめすべきことふそさても祢のこはいくつか  
つかうまつらぬへう侍んとまめたちて申せ給まつか  
ひとつかまてもあらんかしの給ふ心へはてゝとち  
故  
一條禪閣御親に祢の子とは亥の子のもろにつきて

亥の字の算の三が一といふ詞をとれり中畧祝着の  
夜の事ふれゆさすお又あらはにいはずして餅四杯  
きも三ヶ一といふは四の字をいむ之〇又ある説に  
子は兎之一月に子を十二及うむにふそらへ祝して  
餅のかち十二之三ツク一ツク合せて四之三をかく  
れは十二之四をはかりてふかも三と四との数を  
ふくみたり愚竊に按ずるに算家の三分の一とは異  
ふる次湖月抄に源氏三ヶの大事の一といへれは  
高家の秘説はえらさずかし

つれく百三十七段に資季大訥言入道とかや聞へた  
③ 徒然草馬のきつ里やうの算

る人具氏宰相中将とくしんさうしやうにあひてめぬしの問ぬんほどの事  
何事ふりとも答へ申さんといはれけぬは具氏いか  
侍らんと申されけるをさうはあらがひたまへといは  
れてたのしき事はかたはしもまなびえり侍らぬ  
はたぐぬ申までもなしふにとなきさう事の中にお  
ほつかふき事をこそとひ奉らめと申されけりまして  
おゝもとのあさき事は何事ふりともあきらめ申さん  
といはれけぬは近習の人々女房ふんども興あるあら  
かひをふくは御まへまであらせはるでしまけた  
らん人は供御をまふけらるべしとさだめ御まへまで  
めしあわせられたりけるに具氏おさふきより聞ふら  
ひ侍れどその心しらぬ事侍り馬のきつりやうきつふ

のおかふかくばれいりぐれんとうと申事はいかかる  
心にか侍らんうけたまわらんと申されけるに大納言  
入道はたとつまりて見はそらう事ふれいふにもた  
らちといはれけるをもとよりふかき道はしり侍らず  
そらう事をたつぬ奉らんとさだめ申友と申されけぬ  
は大納言入道まけに成て所課いかめしくせうれたり  
けるとぞ

ある説にいほくこれはふぞくまで十六ととく  
其いはれは六むまのきつ吉里取やうきつ狐まのおかふかく  
ほれいりぐきんとく十とくと十とくの中の字残くり取て  
のこり六十と成残さかしまにして十六ふりぐれん  
とは上下へひくりかへすを云ふくばれいりぐれ

んみふ古語之といへり忘かれどもその本説残しう  
すたゞ小児の戯れまそふふるのみ

② 蘇武の事

むかし漢の世に蘇武といふ人胡國にとらはれて年久  
しく雪を蓄て日をおくれりたゞ月のまどかふるを見  
る事二百三十五度にしてふるさとへかへりきたれば  
鬢髭ごとく白し胡國に居る事いとしむと問

答十九年

術二百三十五を置十二月をもつて除けば十九年を  
得はした七ヶ月は閏月のかずとあるべし

③ 田の中の牛の事

ある農夫田地のうちにはしら残たて、牛をつぎ置  
たりこの牛一夜のうちにはしらのめぐり残ふみあう  
す事一畝十四歩八分ありつぎたる縄のふがさを問

答縄の長さ四間

術一畝に田の法三を乗三十歩とふるへ十四歩八分  
をくわへ四十四歩八分を田法七に除き六十四を得  
こ此を開平にのぞけば八間と成を折半して四間は  
うしの縄のふがさく

④ 紙鳶残のぼす事

三月清明のころ童子数人河のほとりにあつまりて紙



爲をはふつ風にまかせて空中にのぼるゝとの長さ九  
丈五尺その上下相應ずるところ逆をはかるに七丈六  
尺あり此紙爲のたかさ何程と問

答たかさ五丈七尺

術こ此は弦ありて長をもとむる法之かるが故に繩  
九丈五尺を自乗して九千〇廿五とふるこの内七丈  
六尺自乗したる五千七百七十六を減じあまり三千  
二百四十九を開平法にのぞけば五丈七尺とふる之

算法童子問 卷一 終

昭和十一年四月二十日印刷  
昭和十二年四月廿四日發行

東京市目黒区月光町一四五番地  
發行所 澤村 寛  
兼印刷人

印刷所

印刷所

古典数学書院

印刷部

東京市目黒区月光町一四五

發行所 古典数学書院



302  
246

終

